

インドシナの古代瓦

－「クメール瓦」前史－

堀川 洸太郎

はじめに

東南アジアにみられる瓦の様相は空間的、時間的に極めて多様であり、その起源および受容といった点で不明且つ各遺物の年代観も不確定なものが多い。特にカンボジアのアンコール期に出現するクメール瓦には、純粋に形態的特徴のみに着目すれば古代ギリシャの瓦との類似性が認められる（上野1995）が、ギリシャ建築の、しかも瓦のみが時代地域も遠く隔たったアンコール王朝において採用されたと考えるために十分な根拠は、瓦そのものの以外には求め難い。インドシナ半島において瓦の出現は国家の成立と時期を同じくする。瓦は寺院や王宮といった、王権に関わりの深い建築物に使用され、その景観を荘厳したと考えられている。したがってその様相には、東南アジアにおける国家の成立、ひいてはその性格の一斑がみてとれる。

東南アジアにおける瓦は各地域、時代によってそれぞれ独自の様相を呈しているようにも見える。しかし例えばベトナム中部に紀元後2世紀に成立した林邑の初期の首都「典冲」に比定されている、広南（Quảng Nam）省茶蕎（Trà Kiệu）遺跡に出土する人面紋瓦当は北部の北寧（Bắc Ninh）省ルンケー（Lũng Khê）城、さらには中国南京にも出土しており、古典的に「インド化した国家（Cœdès1944）」、や中国式的国家といった理解でとらえられてきた諸地域の文化的枠組みを超えた交流の様相がうかがえる。即ち東南アジアの古代国家は相互の文化的接触のもと発展してきたのであり、一地域における瓦の受容もまた他地域との比較を通じて理解される必要があるといえる。しかし依然としてアンコールもふくめた

東南アジアにおける屋瓦研究の大部分は各遺跡における単なる記述、あるいは部分的に他地域との関連、伝播を示唆するにとどまっており、その歴史の変遷に関する考察には至っていない。

そこで本論では、特にベトナム、カンボジアを中心に、アンコール期に至るまでのインドシナ半島の瓦について、製作技法を確認可能な遺跡出土資料を概観し、製作技法の分類を通じて当地域における造瓦技法の変遷、ひいてはクメール瓦成立の背景に迫ることをめざす。

1. 各地の瓦に関する先行研究

以下では各地の瓦を遺跡（第1図）ごとに概観し、その製作技法について整理する（第1表）。



第1図 遺跡一覧

第1表 遺跡一覧

時期	遺跡	遺跡の性格	種類	粘土	円筒成形法	備考
前2世紀	Co Loa	ドンソン文化期から北属期にかけての城郭	東アジア式本瓦葺	粘土紐	泥条盤築	雲紋瓦当を伴う。
後2世紀	Lung Khe	北属期の城郭	東アジア式本瓦葺	粘土板、紐併存か	泥条盤築、模骨	蓮華、人面紋瓦当を伴う。
後2世紀	Trà Kiệu 下層	林邑の初期の都「典冲」に比定	東アジア式本瓦葺	粘土板	模骨（展開桶？）	Go Camと共通か。
後2世紀以降	Trà Kiệu 上層	林邑の初期の都「典冲」に比定	東アジア式本瓦葺	粘土紐	泥条盤築	人面紋瓦当を伴う。
後2世紀	Go Cam	林邑の居住遺跡	東アジア式本瓦葺	粘土板	展開桶	展開桶を使用。
不明	Cat Tien	不明。ヒンドゥー教寺院群	カッティエン式？	粘土板	成形台？	
0～5世紀	Go Tu Trám	オケオ文化	古代インド様式系	粘土板	手づくね、成形台	葉形瓦当を伴う。
7～？	Sambor Prei Kuk	真臘の都イーシャーナプラに比定	古代インド様式？	粘土板？	手づくね？	
10～12世紀	Tani kiln	アンコール期の瓦陶兼窯	クメール	粘土紐	泥条盤築	
16世紀？	Western Prasat Top	ヒンドゥー、後に仏教寺院	クメール	粘土紐、板併存	模骨、成形台？	「平瓦一枚作り」あり。

1-1. ベトナム北部

・古螺（Cổ Loa）城

中国式の平瓦と丸瓦が出土。外城南郊のバイメン（Bãi Mèn）地点出土資料から製作技法を検討した西村昌也は、1. 巻き上げ作りで円筒をつくり（泥条盤築技法）、2. 叩き板、あて具により成形。3. 一端を細くして玉縁成形。4. 細くした端部に指で三本の線を引く。5. 円筒外面に半裁の目安の線を引き、6. その線によって円筒を二分割するという一連の製作過程を復元した（Nishimura, Trần T. K. Q. 2006）。この瓦の年代観について、西村はコーロア城の利用年代である紀元前3世紀から前2世紀前半に収まるとしており、ベトナムで発見された瓦の例としては最古のものに属することとなる。瓦当文様は雲紋が採用されており、中国では秦漢代に特徴的な文様である（第2図）。

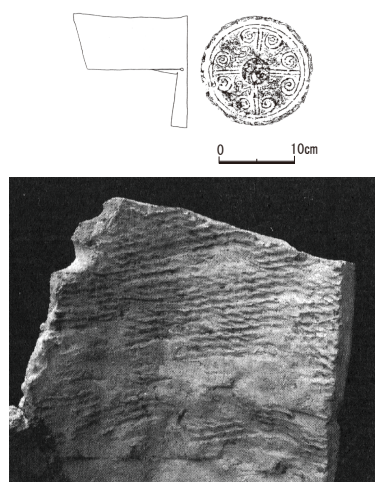
・ルンケー（Lũng Khê）城（北寧省）

瓦当、平瓦、丸瓦が出土している（第3図）。瓦当については蓮華紋、人面紋などが瓦当面に表されたものが見つかっており、典型的な漢から三国時代の瓦当の特徴を示している（西村2011b）。山形真理子によればこれらのうち、人面紋瓦当をもつ瓦には凹面に布目圧痕がみられないものもある一方、布目瓦も多くみられ、当遺跡では丸瓦の製作技法に二種類が認められている。また粘土板作りの痕跡である糸切痕が布目痕にかさなって観察可能なものもあるという。凸面の調整方法も様々であり、ナデ、集合沈線（ハケ目）、叩きがあるとされる（山形2012）。

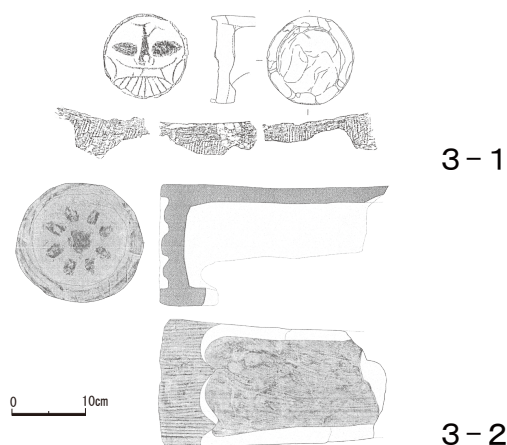
当遺跡出土の人面紋瓦当は、鄧鴻山らによって分類され年代観が与えられている（鄧ほか2017）。それによれば、人面紋瓦当はおおきくAからDまでの4型式に分類される。ハノイ国家大学人文学院による2014、2015年の調査では、3つのトレンチの層位を前漢～三国呉、

六朝、唐、大越の4段階に分け、人面紋瓦当のA型は第1段階、BからDまでは第2、3段階に位置付けられた。このうち第1段階のA型瓦当には接続する丸瓦の凹面に布目痕が確認されている。2012から2016年にかけて黄曉芬を代表とする日越共同調査隊がおこなった発掘調査では、I期（前漢後期～後漢）、II期（三国～東晋）、III期（南朝）、IV期（隋唐）の基本層序が確認された。ここでもI期から出土する平瓦に布目痕が確認され、丸瓦には布目痕とともに粘土板を切り出したことを示す糸切痕も確認されている（第3図3-2）。即ち当遺跡においてはその最初期から造瓦に粘土板桶巻き作りが採用されている状況がうかがえる。

総じてベトナム北部では秦末の南越、つづく漢による郡の設置という政治的動向に呼応するように、瓦も中国式のものが採用されている。丸瓦の製作技法に注目すると、円筒材料として粘土紐と粘土板の双方が確認されているが、古螺例では粘土紐のみであり、粘土板と粘土紐の併用はルンケーの例を待たねばならない。また模骨の使用については、古螺遺跡出土資料には認められず、叩き板とあて具による成形が想定されるものの、ルンケー例では布目痕を残すものとそうでないものと両方が確認されている。興味深い点としては、当遺跡に出土する人面紋瓦当は、後述するとおりベトナム中部の同時期の遺跡からも出土するが、また中国の南京建業城からも発見されている（賀2003）。しかし南京出土のものは東呉から西晋にいたるまでに収まる（賀2005）のであり、ルンケー例がわずかに先行することになる。西村昌也も同様の指摘をしており（西村2011b）、そうであるとすればベトナム北部においても単なる中国瓦の一方的移入ではなく、造瓦技法のうえで独自の展開がなされた最初期の例として注目される。



第2図 古螺城出土瓦当



第3図 ルンケー城出土瓦と糸切痕

1-2. ベトナム中部

・茶蕎 (Trà Kiệu) 遺跡 (広南省)

宝珠 (Bửu Châu) 丘麓での発掘により人面紋瓦当が出土、同遺跡ホアンチャウ (Hoàn Châu) 地点においても柱礎やレンガ列などの建築物の基礎とともに瓦が出土した。ホアンチャウ地点では最下層・下層と上層で瓦の種類が全く異なる。前者には凹面に布目圧痕、凸面に縄蓆紋が確認され、桶巻き作りによる製作とみられる (第4図)。凸面には叩きによる縄蓆紋がつく場合と、同じく叩きによる刻線紋や方角紋がつく場合もある。一方上層出土のものは布目を残さず、凹面に凹凸がのこり、粘土紐巻き上げ作りあるいはあて具の痕跡であるとされ、凸面には集合沈線 (ハケ目) が確認される (第4図2)。山形によれば人面紋瓦当はこのうち上層からの出土であり、下層・最下層の布目瓦には瓦当が伴わなかった可能性が高いとされる (山形2012)。

ホアンチャウ地点最下層・下層出土の布目瓦と同様の瓦を大量に出土したのが茶蕎遺跡の東南約3.5kmに位置するゴーカム (Gò Cẩm) 遺跡である。2000年の試掘調査では印紋陶などの漢系遺物にともない大量の布目瓦が出土し、翌年からのベトナム考古学院による調査では木造建築址が検出された。出土した平瓦凹面には模骨を構成していた短冊状の板やそれを綴り合せていた紐の痕跡 (第4図4-4) まで確認できたとされる (山形2007)。

1-3. ベトナム南部

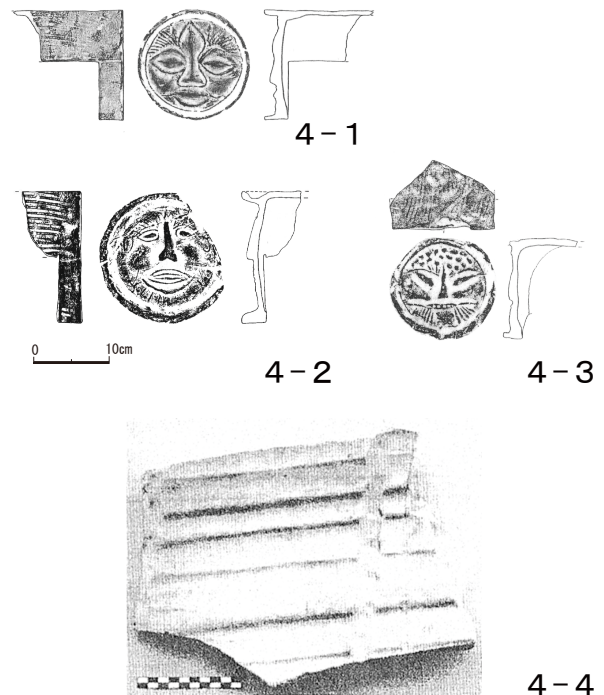
ベトナム南部では、メコンデルタ地域を中心に、東南アジアにおける最初の国家である扶南に関連する「オケオ文化」が展開している。

・ゴートゥーチャム (Gò Tư Trâm) 遺跡 (安江省)

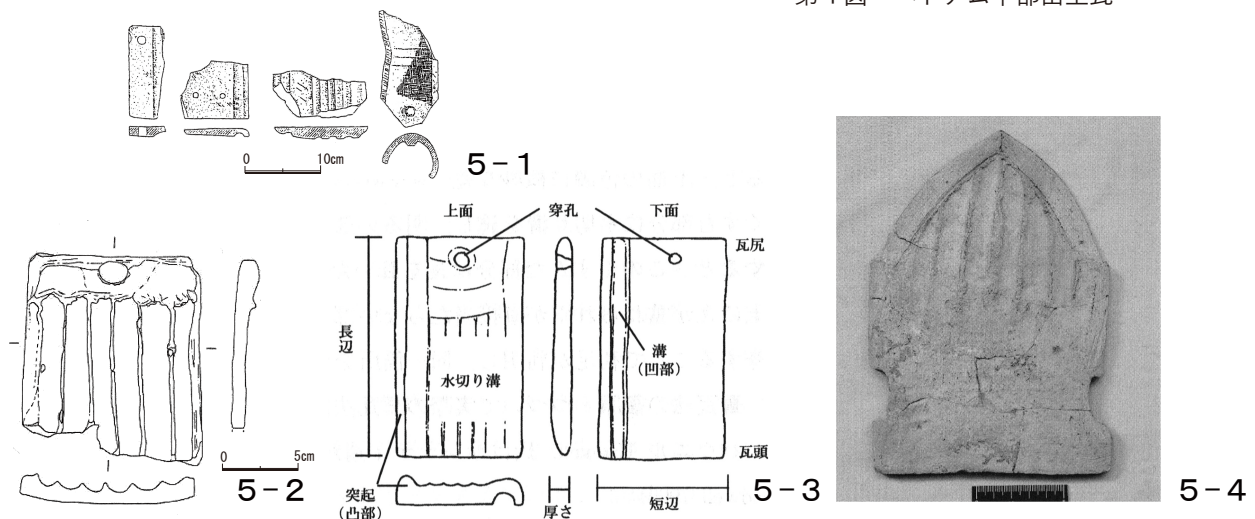
当遺跡は2002年に3地点に発掘坑が設けられた。基本層序は、表土 (耕作土) 層、上層 (盛土)、下層 (オケオ文化層)、無文化層の四層に分けられている (平野2005)。

当遺跡出土の瓦は、大きく平瓦、軒先瓦、丸瓦の三種類に分けられる。平瓦の形態としては、表面に3から7条の水切り溝がほどこされ、瓦尻には屋根に固定するためと思われる釘孔があるものと、無孔のもの両方が存在する。平瓦は棧瓦のように端部を重ね合わせて葺くものと考えられ、丸瓦は道具瓦として棟に用いられたと想定されている (第5図5-1)。

平野によれば平瓦の製作技法は手づくねであるとさ



第4図 ベトナム中部出土瓦



第5図 メコンデルタの瓦

れ、成形後に縁をへら状のもので削って軽く押し当てた痕跡が残るとされるが、一方「型のようなものに押しあてて形作するために縁がもりあがっているもの」もあるとされる（平野2006: 31）。これを図版から確認することはできないが、部分的に型作りが採用されていた可能性もある。年代観について、ゴートゥーチャム遺跡において「古代インド様式」瓦は、下層（第1発掘坑では深さ2.76m）から出土することから、オケオ文化第一期（前2～後3世紀）後半あるいは第二期（後4～6世紀）前半に位置付けられる可能性が高いとされる。

当遺跡出土の平瓦の特徴は、大谷宏治の定義する所の「古代インド様式」に由来すると考えられている（第5図5-3）。「古代インド様式」は大谷により「平瓦と

道具瓦（丸瓦、妻瓦、棟瓦など）、カラシャ（頂華、棟飾り）」の組み合わせで、平瓦は「表面左側に突起が、裏面右側に表面の突起と組み合わせるための溝が形成されている」と定義される（大谷2008）。しかし当遺跡ではこれに当てはまらない形態のものも確認されており、重ね合わせるための凹凸を持たないものや、瓦中央部に幅広い溝が一つのみ施されているものもある。さらに平瓦の次に出土量の多い葉形瓦当は、類似するものもインドには確認されず、当地域独特のものである（第5図5-4）。これらの瓦当は先端が尖り東アジア式のものとは大きくことなり、後述するクメール瓦の瓦当に類似する。

・カッティエン（Cát Tiên）遺跡（林同省）

壺や注口土器（Kendi）などの土器、リング、金葉、そして瓦などが出土している。瓦には平瓦と丸瓦が存在し、平瓦は平面形が方形もしくは台形を呈し、中央で二つに折り曲げられた形状をとる（第6図6-1）。凸面中央の溝に円錐または角柱状の突起が一箇所か二箇所にとりつく。三浦由紀子による製作技法の推定では、平瓦本体は型あるいは台などを用いたとされるが、日本の平瓦一枚作りなどにおけるような布目痕は確認されず、ナデ調整の痕跡のみ確認されるようである。ただ手づくねによって円錐状の突起を成形する方法は、クメール丸瓦の凹面に接着される突起に通ずるものがある。

復元案（第6図6-2）によればこれらの瓦の葺き方はその形態同様極めて独特であり、現段階では周辺地域から全く孤立した瓦である（三浦2015）。

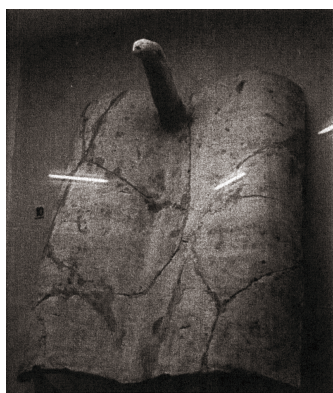
1-4. カンボジア

・アンコールボレイ（Angkor Borei）遺跡（タケオ（Takaev）州）

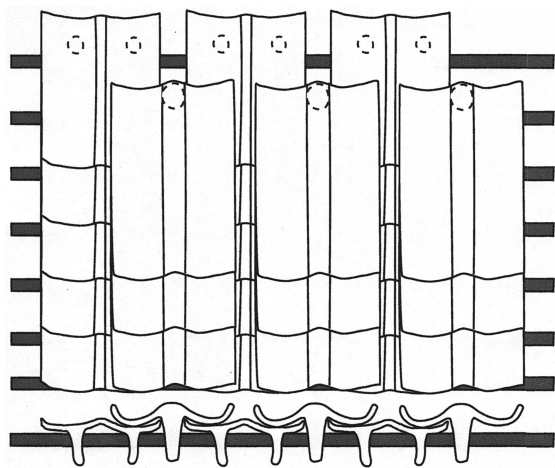
扶南に属する都市遺跡と考えられている。出土した瓦には、大きく長方形で、縦のくぼみに収められる⁽¹⁾ようなものおよび、小さく薄い、表面に溝の刻まれたものの二種のが確認され、5世紀以降のものである可能性が高いとされている（Stark 2000）。後者はオケオ文化に普遍的に出土する「古代インド様式」瓦と同様のものとおもわれる。

・サンボープレイクック遺跡（コンボントム（Kampong Thom）州）

7世紀の創建から16世紀頃まで真臘の都市として機能し続けた遺跡とみられ、主に三つの寺院群と正方形に近い土塁で囲われた都市区から構成される。2003年からの表採調査で、主に都市区において多くの瓦の散布が確認されている（嶋本・チュン2008）。その大部分は長方形の平瓦で、中央に一条の太い溝が設けられ、そ

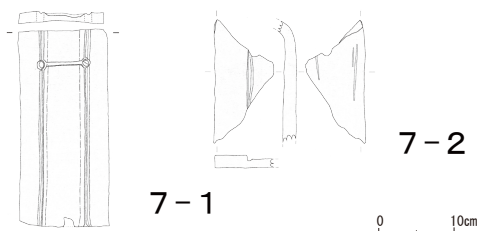


6-1



6-2

第6図 カッティエン遺跡出土瓦



7-2

7-1

第7図 サンボープレイクック遺跡出土瓦

の両側に二箇所の穿孔がなされる（第7図7-1）。粘土円筒分割によって製作されたとみられる瓦は無く、形態、製作技術の点では、後述のクメール瓦との連続性は低い。それ以外にも1961年の調査では、片面に突起がはりつけられた平瓦が大量に確認される。2007年のモニュメントNo.045地点の発掘では、長手方向への字に湾曲するタイプ（第7図7-2）も見つかっている。

この遺跡の瓦とオケオ文化圏の瓦との類似性の指摘（嶋本・チュン2008）もあるが、平瓦という以外に共通性は薄い。屋根瓦か否かという点も踏まえた検討が必要である。

真臘に続き9世紀初頭成立するアンコール朝において用いられたのが、クメール瓦である。『真臘風土記』の「其正室之瓦以鉛為之、餘皆土瓦、黄色」という記載から、寺院や王宮に瓦が使われたと考えられている。アンコール遺跡群及び窯跡遺跡から出土が確認されている。

・タニ窯跡群

平瓦、丸瓦、軒丸瓦、棟装飾瓦など各種の瓦が出土（第8図）。タニ窯跡群A 6号窯出土資料から花谷浩はその製作技法について考察をおこない、クメールの瓦は丸瓦を基本とした技術体系を有すると指摘した（花谷2004, 奈文研2005）。即ち花谷によれば、丸瓦は粘土紐巻き上げ作りの粘土円筒を2乃至3分割してつくられ、軒丸瓦はこれに范型を用いてつくられた瓦当を接続することでつくられる。軒丸瓦の丸瓦部分は通常の丸瓦より

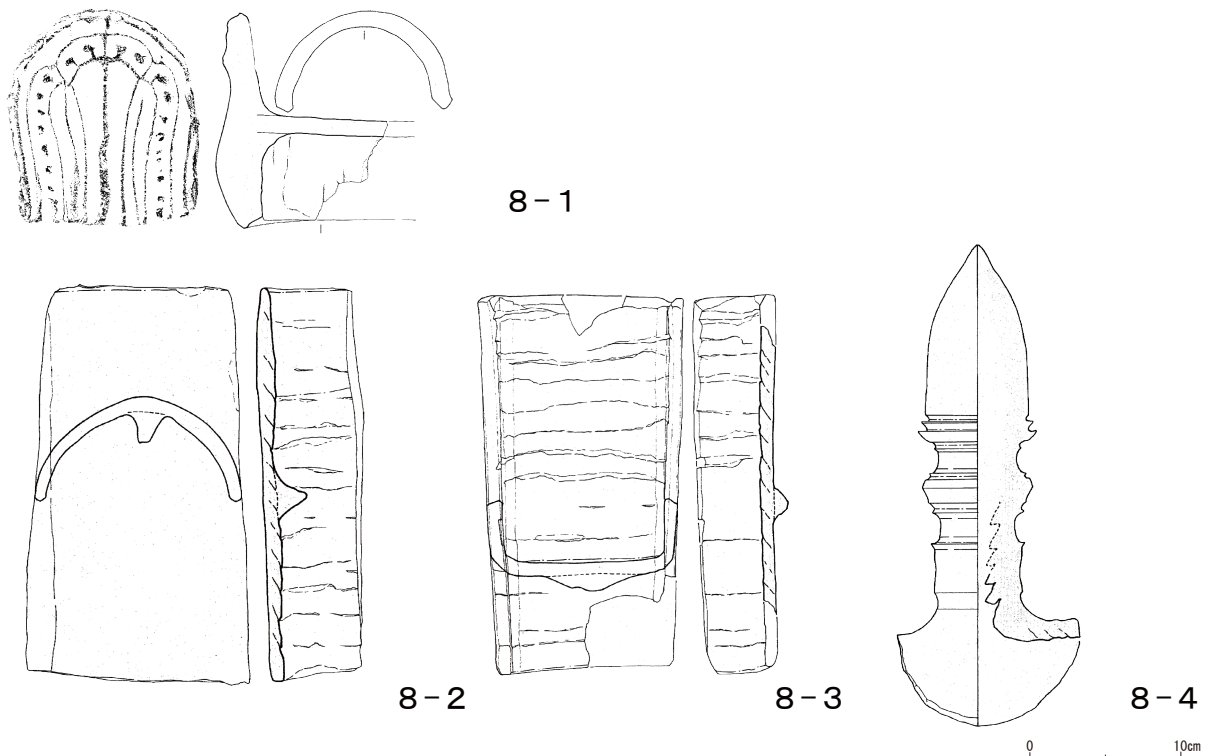
も一回り小型に作られるが、同様に粘土紐巻き上げ作りである。棟装飾瓦については、台部の製作方法として丸瓦を長さ1/2に切り、周囲を円形に削ることで成形されることを指摘した。

上智大学アンコール遺跡国際調査団による同窯跡群B 1、4号の調査でも灰釉、無釉の瓦の出土をみた。これらの瓦もタニ窯跡群A 6号窯出土の瓦同様、瓦当部を除き粘土紐巻き上げにより成形されている。各瓦のサイズにさほどバリエーションはみられず、平瓦、丸瓦に関しては四隅の調整の有無によって各2類に分類されている。（田畑2003; 2005）。

A 6号出土の瓦当については、デュマルセの編年により10世紀第4四半期～12世紀のいずれかに位置付けられるとされる。

・西トップ遺跡

9～10世紀の創建から、祠堂東部に付随する「仏教テラス」の増築にいたるすくなくとも15～16世紀以降まで存続した寺院遺跡と考えられている。仏教テラス周辺及び同基壇内盛土層から平瓦と丸瓦、および棟装飾瓦の3種が出土（第9図）。他のアンコール遺跡に普遍的に使用されていた軒先瓦はみられない。また黒褐釉のかけられるものと、無釉のものの両者が認められる（Sugiyama 2012）。当遺跡平瓦は、タニ窯出土のものなどと異なり、おおくが粘土板の加工により成形されたものであるとされる。またその一方、少数ながら例外的



第8図 タニ窯跡出土クメール瓦

に粘土紐巻き上げ作り（第9図9-3）、さらには「粘土板一枚作り」とかんがえられるものも確認されている。当遺跡出土のものも、他のアンコール地域の遺跡から出土するもの同様に、丸瓦は凹面中央に円錐状の突起を有し、また平瓦は凸面に帯状に突起をともなう。

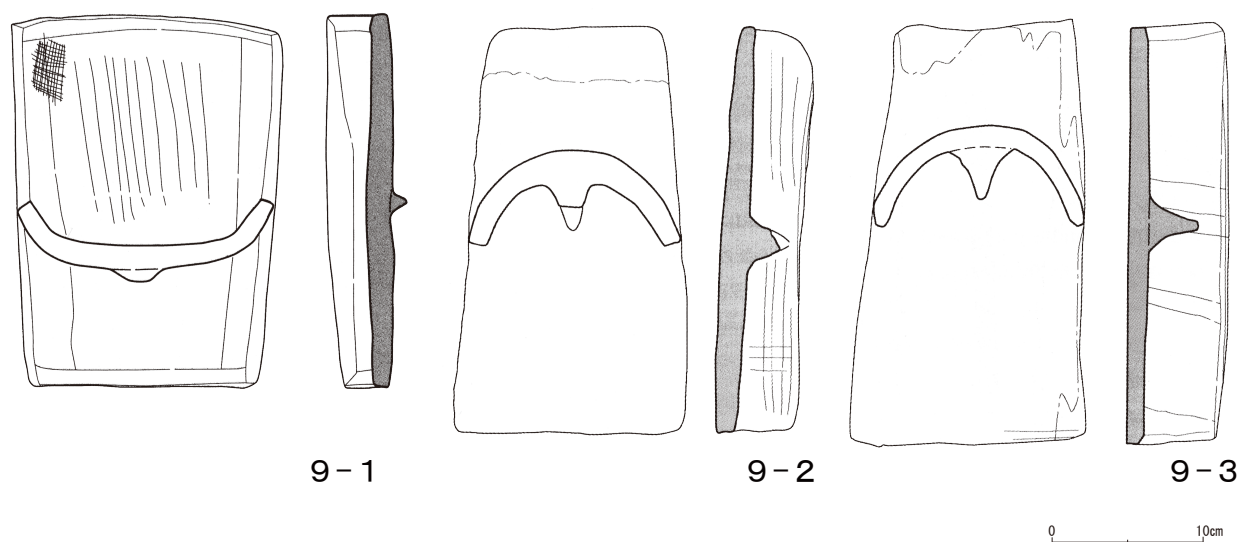
2. 製作技術からみた各地の瓦の比較

以上に述べてきたベトナム、カンボジア各地の遺跡における造瓦技法の様相をまとめると、①泥条盤築技法、②桶巻き作り（粘土紐、粘土板）、③手づくねまたは型作りによる一枚作り、の3種類に大別可能である。そして②については東アジアの瓦同様、粘土紐を巻き付けるものと粘土板を巻くものの2種類があり、また桶の種類としてはあきらかな例としてはゴーカム遺跡例のような展開桶を用いた例のみが報告されているが、中国においては非開閉式の円筒桶から開閉式の桶の使用へと造瓦技術の変遷過程が確認されているのであり（山崎2010）、今後ベトナム北・中部においても非開閉式の円筒桶使用が認められる可能性は高い。

中国では円筒の製作方法に、粘土紐巻き上げののち叩き板とあて具によって成形する泥条盤築技法、粘土紐桶巻き、粘土板桶巻きの3種類が存在し、地方差は認められるものの、基本的にはこの順序によって製作技法の変遷があったと考えられている（谷1984）。北部ベトナムにおける各例も、大きくはこの流れを踏襲していると言える。古螺出土例は特に泥条盤築法という製作技法および雲紋瓦当といった点に関して広西壮族自治区の秦城遺跡、広州の南越國宮署遺址および福建省武夷山城村漢城などの華南の前2世紀ごろの遺跡出土資料との近似性

が指摘されており（山形2012）、洛陽において桶巻き作りが本格的に普及した後漢代とほぼ同時期かそれ以降にルンケーにおいても布目瓦がみられるようになっていく点など、中国における造瓦技法普及の様相と軌を一にしている。

これに対してベトナム中部においては、茶蕎出土の瓦をはじめとして、種類、葺き方の点で基本的には東アジア式の瓦を踏襲しているが、製作技法の上で当地域独自の事情がうかがえる。ホアンチャウ地点最下層およびゴーカム遺跡の年代について、山形は後2世紀である可能性が高いとしており、北部ルンケー出土例と比較すると、両者とも布目瓦の年代は後2世紀とされ、対応している。しかしホアンチャウ地点上層からは桶巻き作りでない粘土紐巻き上げによる瓦とそれに付属する人面紋瓦当が出土している。瓦当様様の類似例として挙げられている中国南京の人面紋瓦当が出土する年代は賀雲翱によれば三国時代の呉から西晋にいたるまでに収まる（賀2005）。中国における当該時期は模骨を使用した粘土紐作りあるいは粘土板作りが、造瓦のおこなわれている地域全域に普及する期間に相当しているが（谷1984）、南京出土の人面紋瓦当には布目丸瓦が接続する（山形2007）ため、技術上の乖離がある。さらに北部のルンケー城出土人面紋瓦当は、先述のとおり最初期のものに分類されるものも桶巻き作りによって成形されている。したがって茶蕎遺跡ホアンチャウ地点上層のものに瓦当様様の意匠において南京との関連性があるとしても、これを直ちに最下層・下層出土遺物同様に、「漢の文化や技術を身につけた人々の南下によって」（山形2005）齎された要素ととらえることはできないだろう。人面紋のモチーフ自体を北部起源（西村2011b）やイン



第9図 西トップ出土クメール瓦

ド由来のマカラ面を表したもの（Trần Q. V. và Hoàng V. K. 1986）である可能性を指摘する意見もあり、また下層の布目瓦が多く、漢系遺物を伴うのに対し、上層の遺物にはクンディ（Kendi）と称される注口土器などメコンデルタ地域、カンボジアなど南方の由来が想定される遺物も共伴する。したがってベトナム中部に出土する人面紋瓦当はこれまで見てきたような中国本土における造瓦技術発展の様相をそのまま反映するものとは言えず、むしろ在地性が強く反映されている可能性がある。なお同じく人面紋瓦当が出土したルンケーでは、人面紋瓦当に布目のあるものとなないもの、即ち模骨使用と粘土紐巻き上げが共存することが確認されているが、粘土板桶巻き作りが主流化するルンケーのなかで、茶蕎と同様に粘土紐巻き上げ作りも一部採用されていた状況を示している。

以上ベトナム北部・中部の瓦については、その形態的特徴は勿論、製作技法のうえでも粘土円筒の分割という基本的な方法において共通している。しかしさらに細かい分類についてみると、ベトナム北部が2世紀に至って中国同様桶巻き作りを採用し、さらに粘土紐作りのみでなく粘土板作りもみられるのに対し、ベトナム中部においては現状、2世紀以降そうした先進的製作技法が抛棄され、粘土紐巻き上げ作りによる造瓦が再びおこなわれるようになるという点を以て、北部と中部で2世紀以降の造瓦技法に違いが出始める傾向がみてとれる。

ベトナム南部にみられる瓦の起源および葺き方ははっきりしない。オケオ文化に特徴的な、古代インド様式に類似する瓦に共伴する丸瓦は、円筒分割による成形ではなく、手づくねにより曲線をなすものであることから、形態の上では勿論、ベトナム中部にまで分布する東アジア式の粘土円筒分割によるものとは技術的にも関係性が薄いといえる。

現在までにあきらかになっているクメール瓦の製作技法は、西トップ遺跡の粘土板作りが報告されている例を除くと、タニ窯跡群にみられるような粘土紐巻き上げ技法が多数派を占めるようである。クメール瓦の分類と小屋組の復元をおこなったデュマルセは、自身が対象としたクメール瓦について「型で原形を成形し外面をヘラで調整したもの」と「布をかぶせた円筒形工具か成形台の上で作られたもの」との二通りの成形方法があったと指摘している（デュマルセ1997: 88）。現段階ではこれらの多様な製作技法が中国におけるように時期差を示す指標となるのか、あるいは工人集団の差を示すものなのか、またはその両者なのかを断定することはできない。しかし重要とおもわれる点としては、アンコール期に先行するプレ・アンコールに属する各遺跡から出土する

瓦は、いずれも粘土円筒分割によるものではなく、クメール瓦とは技術的に大きく断絶しているということである。ただしオケオ文化における「葉形瓦」やカッティエン遺跡やサンボー・プレイ・クック遺跡にみられる瓦の突起などの部分的要素は、クメール瓦とある程度共通した葺き方を示唆するものと評価できよう。

各地域の瓦の製作技法についてまとめると、つぎのように変遷する。

ベトナム北部：まず前3世紀ごろ泥条盤築技法を導入、後2世紀までに桶巻き作りに移行する。この段階ですでに粘土板作りが登場している。

ベトナム中部：後2世紀に模骨使用による造瓦技法が導入され、同時期の北部と同じ状況であったとかがえられる。しかしその後泥条盤築技法による粘土円筒成形法が再び採用される。

ベトナム南部：「古代インド様式」に類似する平瓦と丸瓦が存在する。しかし両者とも粘土円筒ではなく、手づくねにより成形される。のちのクメール瓦のものに類似する瓦当は、範型を使用して作られている。

カンボジア：プレ・アンコール期の遺跡であるサンボー・プレイ・クック遺跡では手づくねによる板状の瓦が主流である。アンコール期に入ると粘土円筒分割による瓦が出現し、その一部には桶巻き作りが採用されている。

おわりに

デュマルセはアンコール期の石造建築について、中国からの影響の可能性を指摘した。またB.Ph.グロリエはクメール陶器の製作技術について、「インド起源の様式から完全に決別」して、中国の影響のもとで成立した可能性を示唆して（グロリエ1998: 182）おり、宗教、政治的にインド由来の文化をおおく受容したアンコール王朝においても建築、窯業などの技術体系の点で中国の影響をうけていることが指摘されている。アンコールの瓦には粘土紐巻き上げ作りによる円筒の成形方法が多いが、アンコール期以前のカンボジアおよびメコンデルタ地域では同様の技法を用いた確実な資料は存在しない。これに対し粘土円筒分割による造瓦技法は基本的に東アジアのものである。

しかしタニ窯跡群出土資料にみられるような、桶を用いない粘土紐巻き上げ作りは少なくともアンコール朝の成立した9世紀には、中国においてはすでに主流ではなくなっており、中国の直接的な影響を想定することはできないだろう。むしろベトナム中部の茶蕎遺跡ホアンチャウ地点上層における泥条盤築技法による造瓦技法が、

アンコール王朝とチャンパー王国の交渉（西村2012: 129）を背景にカンボジアに影響した可能性がかんがえられる。一方クメール瓦が形態の上で東アジア式の瓦と大きく異なるのは、平瓦丸瓦ともに小屋組の棧に引っ掛けるためのものとおもわれる突起が付属する点である。この点は瓦の葺き方に大きく関係するところであり、同じく突起を有するプレ・アンコール期の瓦との関連を考慮する必要がある。またクメール瓦の瓦当は范型を用いるという方法では東アジアの造瓦技法と共通するが、丸瓦部を超えて上に立ち上がるという形態はプレ・アンコール期のメコンデルタに由来するとみられる。

以上クメールの丸、平瓦の成形方法は、東アジア式の円筒分割法をもとに、おそらくはベトナムなどを経て成立したと言えるが、瓦当や突起などの要素は、むしろプレ・アンコール期の特徴を多く引き継いでいる可能性が想定される。しかし各地域における瓦、特にアンコールの瓦の様相が明らかでない以上、改めて各地域の瓦について本論に示したような視点からのより体系的、包括的な研究が要求される。

註

- (1) 原文「rectangular large, heavy tiles designed to fit into a longitudinal depression」。写真および図版がないため詳細不明である。

引用文献

- 上野邦一 1995「クメール建築誕生の背景」『文化遺産の保存と環境』講座「文明と環境」12、朝倉書店。
- 太田千香子、山形眞理子、ブイ・チー・ホアン 2011「ベトナム東南部・ラムドン省カッティエン遺跡の遺構と遺物」『佛教藝術』319、85-118頁。
- 大谷宏治 2005「東南アジアの瓦覚書」『インド考古研究』26、85-106頁。
- 大谷宏治 2008「古代インド瓦の特質」『東南アジア考古学会研究報告第6号 東南アジアの生活と文化Ⅰ：住まいと瓦』47-頁。
- 賀雲翱 2003「南京出土の六朝人面紋与獣面紋瓦当」『文物』2003年第7期、37-44頁。
- 賀雲翱 2005『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社。
- グロリエ ベルナル著、津田武徳訳 1998「アンコール王朝陶磁入門—9世紀末から15世紀初め」『東南アジア考古学』18、167-212頁。
- 佐川正敏 2012「南北朝時代から明時代までの造瓦技術の変遷と変革」『古代』129・130合併号。
- 佐原 真 1972「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58/1、30-64頁。

- 嶋本紗枝・チュン メンホン 2008「古代都市イーシャナプラにおける表採調査の成果について」『遡航 早稲田大学文研考古誌』26、59-74頁。
- 田畑幸嗣 2003「クメール陶器の製陶技術に関する一考察—タニ窯跡出土資料を中心に—」『東南アジア考古学』23。
- 田畑幸嗣 2004「アンコール王朝における窯業技術の成立と展開—タニ窯跡群出土資料の技術論—」上智大学博士論文。
- 田畑幸嗣 2005「クメール陶器の型式学的研究—アンコール地域におけるクメール灰釉陶器の分類—」『東南アジア考古学』25号。
- 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』69/3、70-97頁。
- デュマルセ ジャック（松原容子訳） 1997「クメールの小屋組と瓦」『アンコール文化遺産保護共同研究報告書』Ⅰ、奈良文化財研究所。
- 鄧鴻山・阮文英・阮昭雄（鄧鴻山、木下保明訳） 2017「ルイロウ城址出土の人面文瓦当に関する初歩的考察」黄曉芬編著『交趾郡治・ルイロウ遺跡Ⅱ—2014—2015年度発掘からみた紅河デルタの古代都市像—』フジデンシ出版、138-146頁。
- 奈良文化財研究所 2005『タニ窯跡群A6号窯発掘調査報告—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—』奈良文化財研究所学報第73冊。
- 西村昌也 2011a「コーロア城の研究—ベトナム史上最初の大規模城郭遺跡の魅力—」『ベトナムの考古・古代学』125-140頁。
- 西村昌也 2011b「ルンケー城の研究—初期歴史時代前・中期の中心城郭“龍編”の実態—」『ベトナムの考古・古代学』155-176頁。
- 西村昌也 2012「ベトナム形成史における“南”からの視点—考古学・古代学からみた中部ベトナム（チャンパ）と北部南域（タインホア・ゲアン地方）の役割—」『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」—歴史学・考古学研究からの視座—』105-141頁。
- 花谷 浩 2004「クメール瓦の制作技法」『奈良文化財研究所紀要2004』奈良文化財研究所。
- 平野裕子 2005「ベトナム南部 メコンデルタの土器資料：ゴートウチャム遺跡の注口付き壺と瓦を中心に」『上智アジア学』23、177-184頁。
- 平野裕子 2008「メコンデルタより出土した瓦資料—オケオ港市遺跡群ゴートウチャム居住址出土品を中心に—」『東南アジアの生活と文化Ⅰ：住まいと瓦』東南アジア考古学会研究報告6、59-66頁。

- ブイ チー ホアン 2005「カッティエン遺跡群－新出資料とその考察から－」『東南アジア考古学』25、177-184頁
- 三浦由紀子 2015「ベトナム東南部・カッティエン遺跡の瓦に関する基礎的考察」『東南アジア考古学』35、43-56頁。
- 山形真理子 1997「林邑建国期の考古学的様相－チャキウ遺跡の中国系遺物の問題を中心に－」『東南アジア考古学』17、167-184頁。
- 山形真理子 1998「林邑国の形成に関する考古学的考察－外来・在地の両要素から考える－」『東南アジア考古学』18、51-89頁。
- 山形真理子 1999「ベトナム中部の国家形成期遺跡」『季刊考古学』66、66-70頁。
- 山形真理子 2005「林邑の都城」『東南アジア考古学会研究報告第3号 東南アジアの都市と都城』33-52頁。
- 山形真理子 2007「ベトナム出土の漢・六朝系瓦」早稲田大学シルクロード調査研究所編『中国シルクロードの変遷』アジア地域文化学叢書7、240-271頁。
- 山形真理子 2012「南境の漢・六朝系瓦－ベトナム北部・中部における瓦の出現と展開－」『古代』129・130合併号。
- 山崎信二 2010「平瓦製作技法からみた古代東アジア造瓦技術の流れ」『奈良文化財研究所研究報告第3冊 古代東アジアの造瓦技術』3-15頁。
- Cœdès, G. 1944 *Histoire Ancienne des États Hindouisés d'Extrême-orient*. Hanoi Imprimerie d'extrême-orient.
- Nishimura Masanari, Trần Thị Kim Quý 2006 Những mảnh ngói của di chỉ Bãi mèn (Khai quật 2003) phân loại và kỹ thuật chế tạo. Những Phát Hiện Mới Về Khảo Cổ Học năm 2005, pp.192-193.
- Stark, M. T. 2000 *Pre-Angkor Earthenware Ceramics From Cambodia's Mekong Delta*, Udaya, pp.69-90
- Sugiyama, Hiroshi 2012 3. Roof tiles. Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site. Nara National Research Institute for Cultural Properties
- Trần Quốc Vượng và Hoàng Văn Khoán 1986 Đầu ngói Trà Kiệu Quảng Nam Đà Nẵng. Những Phát Hiện Mới Về Khảo Cổ Học năm 1985, pp.235-237

